

「情報学」の試み

丸 本 郁 子

I はじめに

最近情報学はちょっとしたブームである。雑誌に特集号が計画され、関連した書物は書店にあふれている。学校を出、社会で働いている人達が、自分にとって必要な情報を集め、利用する能力をいかに切実に要求しているかを見る思いがする。教育機関にいる一員として、必要とされる力を与えていなかったのではないかと反省させられる。

情報学と言えば、従来の図書館学の範中に入り、専門家としての図書館員やドキュメンタリストの養成をする学問と思われて来た。その知識と技術を、一般の学生に対し与える必要がある事は、最近になって、この様に、ようやく社会の方が先取りをする形で、認識されて来たと言えよう。もちろん図書館界においてその重要性は繰返し論じられて来たのであるが、学校教育の体系の中には、未だに組み込まれずにいるのが大勢である。小・中学校への55年度及び56年度からの新指導要領が示され「ゆとりのある教育」が言われているが、そこにも図書館の利用教育については依然として積極的に取り組む姿勢が見られない。この状態で大学に送り込まれて来た学生を、どう指導したら良いかが我々の課題である。

II 本校の取り組み

本校では50年11月に行なわれた図書館資料利用に関するアンケート調査により、当短大の学生達に対して積極的に資料利用の指導がなされねばならないとの合意が得られた。

通常行なわれている方法は、新入学生に対する図書館利用のオリエンテーションである。各校とも種々の工夫をし、それなりに成果をあげている報告がなされている。しかし同時に、その限界もはっきりして来たと言える。現状の学生に対しては、オリエンテーションだけでは不十分であり、教科目として単位を与える形での、一般学生を対象にしたプログラムを作り出さねばならないと思われる。

51年度は、カリキュラム委員会の提案もあり、試みとして、次の二つのレベルで利用教育を行った。

A サマーコース

名称：論文・レポートの書き方

対象：1，2年の希望者 計14名

時間：3日間の集中講義 1日3時間

目的：短期大学の学習に必要なリサーチ・テクニック及び資料を学ぶ。

単位：なし

B 教科

名称：情報科学

科目の種類：実務英語の専門科目。選択

対象：2年生 41名（途中で21名放棄）

時間：通年 50分授業を週1時間 計26時間（そのうち前半13時間が一般学生に対するプログラムとして作られ、当研究の対象である）

目的：情報の概念をつかみ、調査研究の過程を把握させる。情報・資料の収集・蓄積及び利用の方法を個人のレベルと、企業や研究機関でのレベルに分け、その基礎を学ぶ。前期は特に短大の学習に必要な基本的リサーチ・テクニックを訓練する。

この他に各教科の授業において全教員が何らかの形で、資料利用教育を念頭においての展開を試み、協力がなされた。

「情報学」の試み

51年11月に、前年と同様の資料利用に関するアンケート調査を実施し、その結果を、学内教員の研究会で発表、検討をした。

以上の準備段階をふまえ、52年度より独立して次の科目が発足することとなった。

名称：研究調査法

科目の種類：一般教育科目。人文科学，社会科学，自然科学の共通科目。
選択

対象：主として1年 56名

時間：前期 週2時間 計26時間

目的：基本的なリサーチ・テクニックを訓練し、短大の学習に役立たせると共に、情報化社会に備える。

単位：2単位

51年度に行なった「情報科学」は52年度は移行措置として2年生を対象に同様に行なう。53年度からは「ドキュメンテーション」として1年次に研究調査法を履修した者のみ選択出来る科目とし、やや進んだ形の情報検索の基礎を学ぶ科目にする予定である。

Ⅲ 指導内容

51年の情報科学（前期分）及び52年の研究調査法で展開した内容を更に検討し、今後の一般学生に対する指導案を作り上げていきたいと思うので、ここに、授業内容のシラバス，教授方法，評価法，及び問題点をあげる。

A 教授要目

1 序 論

- a 情報：定義 特性
- b 情報源：非記録情報源（環境，電波，人……………）

記録情報源（文献，AV資料……………）

c 情報化時代：情報化社会の特徴，各種の問題の出現（情報公害）

d 情報学の必要性

個人のレベル（学習法，情報処理能力）

社会のレベル（情報管理，流通・整理のシステム）

2 情報の流れ

情報検索システム

創造—記録—収集・選択—蓄積—検索—要求者—利用

3 短大学習における調査法

a 頭の働かせ方，脳の働き

判断力，記憶訓練，ゲーム，問題意識，法則性，型にはまる危険，視点

b 調査の10 Steps

Step 1 主題選び

興味，目的，対象，能力，限界，材料

Step 2 バックグラウンド・リーディング

教師・図書館員の利用，メモ，読む技術，速読法，本の構成

Step 3 予備アウトライン作成

手順

Step 4 文献カード作成

Step 5 資料収集

図書館，カタログ，レファレンス・サービス，レファレンス・ブック，ラジオ，テレビ，新聞，雑誌，インタビュー，アンケート，資料の評価

Step 6 情報カード作成

要約，パラフレイズ，引用，意見，B6カード，見出し

「情報学」の試み

Step 7 最終アウトライン

組織化, 論理的展開, 文の構成法, アウトラインの形式

Step 8 下書き

文, パラグラフ, 表現, 序論, 結論

Step 9 注と文献目録の作成

自説と他説, 学者的良心, 注の用い方, 形式

Step 10 仕上げ

原稿用紙の用い方, タイプ, 形式

4 図書館の分類とカード・カタログ

分類法, 日本十進分類法, 相関索引

目録の種類と用い方 (著者, 書名, 分類, 件名, 辞書体, 冊子体)

5 図書館での主な資料

一次資料, 二次資料

a 書誌・索引

参考図書 of 解題, 書誌 of 書誌, 全国書誌, 選択書誌, 主題書誌, 個人

書誌 蔵書目録, 所在目録

書評, 新刊紹介, 引用文献リスト

雑誌記事索引, 新聞記事索引, 雑誌総目録, 総索引

抄録

b 百科辞典・年鑑

特徴, 索引の用い方

c 辞書

日本語: 口語, 古語, 漢和, 新語, 外来語, 方言, 発音, 諺語名句,

双解, 用語索引

英語: unabridged, abridged, etymological, synonyms, the-

saurus, usage, slang, rhyming, pronunciation, abbreviation (アメリカ, 英国)

d 人名・地名辞典

人名, 専門人名, 名鑑, 地理, 地名, 地図, 旅行案内

e その他

政府刊行物, A・V資料

人文科学, 社会科学, 自然科学資料

6 その他の情報源

公共図書館, 大学図書館, 専門図書館, 博物館, 資料館, 各種団体, 会社, 催し, 書店, マスコミ, ミニコミ

7 新しい動き

図書館の相互協力, 情報ネットワーク, コンピュータ, データ通信, ファクシミリ, マイクロ化

B 教授法

大きく二つのポイントに分けて指導をした。一つはシラバスに沿って講義を中心に進める。他は各自, 自由なテーマを選ばせて小論文(原稿用紙30枚以下)を書く事を課し, その過程を通じ具体的にリサーチの各ステップの指導をする。後者は日時を限り, 予備アウトライン, 資料文献リスト, 資料カード, 最終アウトライン, そして論文提出と, 各時点でチェックをする。

前者は, 次回の資料や参考図書の個所を指定し, 学生の発表も加えて講義をする。本校の図書館に無い資料もあるので, アメリカン・センター, 公立図書館等, 近くの資料センターを利用する課題もかなりあり, 自然に他の施設を用いる習慣をつける事もねらった。

教材は毎回プリントを作り配布する。本校が英語科である性質上, 日本語と英語両方の文献の紹介が必要で, 既成の資料でそのまま用いられるものがなかった点と, 新しい資料を加える必要があるからである。

「情報学」の試み

C 評価法

各自の小論文（40点）と筆記試験（40点）及び授業中の提出物（20点）の三つを評価の主体とした。

D 問題点

初めての試みであるので、何が本校の学生に必要であるのかつかめず、教授要目も体系的なものになっていない。まとめるに当り、アメリカの大学生向けの調査法の本を参考にしたが、それに影響され、資料解題にかなり重点がかかった。しかし学生達はさほど興味を示さなかった。それ等を必要とする環境に無いのであろう。

時間と内容のバランスであるが、51年度の13時間では、この範囲をカバーするのは不可能であった。52年度はこの内容に二倍の時間をかける様に組みなおしをした。

図書館の体制が不備である事は承知で開講したのであるが、やはり資料不足で、かなり学生に余分な労力をかけ、意欲を殺いだ結果となっている。ただこの教科を学ぶ事によって学生が図書館に積極的な要求をする事になり、それが結果的に館の質の向上につながる事を期待するものである。

教授者としては、この広範囲な各分野で扱われている対象に精通している訳でなく、自信を持って学生を引き込んでいく力に欠けた授業が多かったことは最大の問題である。ただこの分野でベテランのみがこのコースを受持つ事が可能であると完全主義を目指すならば、現在の日本において人材を確保する事はむっかしく、コース自体、成り立たなくなってしまうであろう。より研鑽を積む事と、各分野の専門家の意見を加え、より良いシラバスの完成と資料の作成が欠点を補ってくれるであろう。

小論文の扱いに関してはかなり問題がある。学生が各自好きなエーマを選んで仕上げたのであるが、当然それが広範囲に渡り、二つの問題が生じた。一つは本校の図書館に資料が無いことであり、他は教師が対処し切れなかった事である。調査法を学ばせる事に重点があると割り切る事も一つの解決法である。

しかしかなりの時間と労力を学生がこれに掛ける事を思うと、これをもう少し積極的に生かす方法が欲しいものである。

たとえば、この小論文は自由研究として、四年制大学における卒業論文の様な扱いをする。内容に関しては主題に合わせて専門の教師のアドバイスを受ける事にする。完成した小論文の評価もその専門の教師にお願いをし、別に単位を与えるのである。情報学の評価は、論文を仕上げる過程に対してのみなされるとするのも一方法であろう。51年度は論文が仕上がらずに脱落した学生が多かったのであるが、確かに授業とこの小論文の両方をこなして、二単位と言うのは、いささか酷に思える。

クラスのサイズであるが、51年度は最終的に学生が20人程度に減ったので、小論文にも目を通せたが、学生が増加すると問題が生ずる。しかしその場合でも、上の提案の如く小論文の評価に他教科の教師の協力が得られれば、実行可能なのではなからうか。

小論文を読み気附かされた点は、情報学以前に問題がある事である。各種の資料を読みながら、そのポイントを掴む事が出来ていない。結局同じ事を述べている文も表現が異なれば重ねて引用している例がある。又ある著作物の要点を自分の言葉で要約出来ていない。不必要な文章まで引用符に入れて長々と引用する例が多かった。調査法の基礎として肝心の資料を読みこなす力が不足しているのである。現在の短大生の共通の問題点として他教科の教師達と連絡をとり、対策を考えていく必要がある。

IV 学生の反応

51年11月に、「情報科学」を受講した学生自身がこの教科をどう評価するかを知るアンケート調査を行なった。授業準備に要求される量が多いので、前期の段階で半数が受講を放棄したのであるが、その学生にも加わってもらった。

対象学生数40名（そのうち21名は放棄した者である）

「情報学」の試み

A 各学習事項及び教科全体をどう思うか

表1. 各学習事項及び教科全体をどう思うか (%)

	よ っ た	普 通	く だ ら ない
情報学とは その必要性	5 3	3 8	0
情報検索システム	1 8	4 5	3
調査法の10 Steps	7 0	1 8	0
カードカタログ 分類法	6 5	2 8	3
書 誌・索 引	4 5	3 8	5
百科辞典・辞書	3 3	5 0	3
人名・地名辞典他	1 0	6 5	1 0
その他の資料	8	5 3	8
論 文	4 8	2 3	8
全体的にみて	4 8	4 3	0

学習してよかったと積極的に評価されているものは調査の 10 Steps である。カードカタログと分類法の知識も以外に評価が高い。評判の悪かったのが各種の資料の紹介である。日常の学習に直接必要とされないものだからであろう。教授者自身の知識の有無も反映している評価と思えた。かろうじて半数の学生が科目の全体をよかったと評価している。

B 受講を放棄した学生の理由

受講を放棄した学生に、その理由を聞いた。いくつかの項目をあげ該当するものに丸をつけてもらった。多い順に記する。

表2. 受講を放棄した学生の理由

	実数
1 自分の努力が足りなかった……………	18
2 宿題が多すぎた……………	15
3 論文が仕上がらなかった……………	13
4 内容がむつかしすぎた……………	11
5 試験がむつかしそうだから……………	5
6 興味が無いから……………	4
7 授業のすすめ方がつまらなかった……………	3
8 自分の能力が足りないから……………	2
9 短大でも将来も役に立ちそうにない……………	0
9 クラスの雰囲気が悪かったから……………	0

大多数が「自分の努力が足りなかった」を選んでいるが、努力をしようと言う気を起こさせなかった教授法にも問題がある事は、第7位の「授業の進め方がつまらなかった」の3名がはっきり指摘している点で明らかである。又2位と3位の項目で半数以上が指摘している点は、教授者が学生の実態を把握せず過大な要求をし、やる気を喪失させた事実を示している。時間的にも無理があった訳で52年度には改善された点である。

その他自由にコメントをつけてもらったのであるが、この科目の重要性はだれもが認めていた。ごく初歩的と思える目録の使い方や分類の知識が役立ったと記した者が多かった。小論文に関しても、仕上げた者は一様に満足感を表明し、よい勉強になったと肯定的に評価していた。書き上げる事により、自分の力の足りない点の認識——特にまとめていく能力の不足——がなされ、再々学んでいこうと言う意欲を示している者が多かった。

V 利用指導後に見られる変化

51年度に二つのレベルでなされた資料利用指導が、学生のうちに変化をもたらしたかを、数的に見てみようと思う。

「情報学」の試み

50年11年に行なった「図書館利用とそれに関連するアンケート」と同じものを51年11月に行なった。これを比較し ①直接受講しなかった学生にも変化が見られるか ②情報学を受講した学生に変化が見られるかの二点に注意したい。

表3. 調査対象学生数

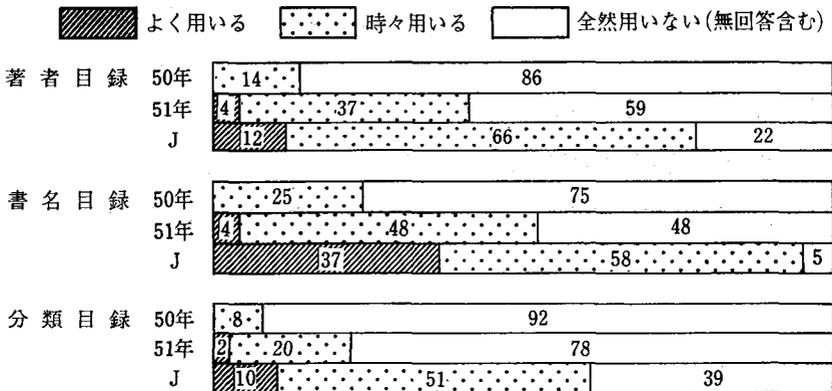
	1 年	2 年
50 年度 (11月)	1 4 3	1 1 4
51 年度 (11月)	5 0	46 + 41(J)

(注…Jとは情報学を受講した学生をさす)

51年度は時間の関係で全学生に調査が出来ず、1年2年共、講読のaとeクラスの学生を対象とした。2年生は情報学を受講しない者が46人。受講した41人は別にJとして比較の対象とした。そのうち半数は途中で放棄しているのて完全に履修した者と言う意味ではない。

A 目録カードの利用度

表4. 目録カードの利用度 (%) (2年生のみの比較)



全体の傾向として、50年度では80%以上の学生が目録を全然用いていなかったのが、51年度では20%近く向上している。情報科学の学生の数値は、クラスで強要される分があるにしても、70%以上の者が目録を用いる様になった事がわかる。分類目録は、一般学生には特に用いにくい様であるが、Jの数が見えるように教科で扱った場合、利用がかなり増加することがわかる。

B NDCの分類番号の定着率(%)

本校の学生がふれる機会が多いと思われる三つの分野の日本十進法分類番号を、いくつかの番号の中から選ばせた正解率である。分類に対する関心度が計れると思う。

表5. NDC分類番号の定着率(%)

	5 0 年 度		5 1 年 度		
	1 年	2 年	1 年	2 年	J
アメリカの小説 933	9	19	28	28	63
日 本 の 詩 911	6	13	22	11	56
キリストの伝記 192	8	13	20	13	54

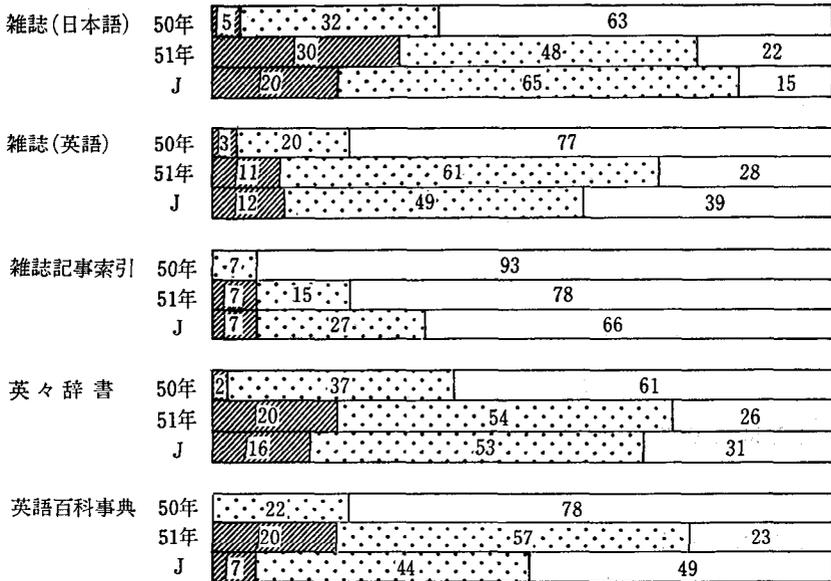
一般の学生でも一年生はかなり変化を示し、50年度に比べ約三倍の者が、この三つに関しては知っていることがわかる。Jの数値からは、指導すれば半数以上は覚えている事が解る。

C 定期刊行物・記事索引・辞書・百科辞典の利用度(%)

上記の資料、特に英語科であるので、英語の資料の利用が変化しているかを見てみたい。

「情報学」の試み

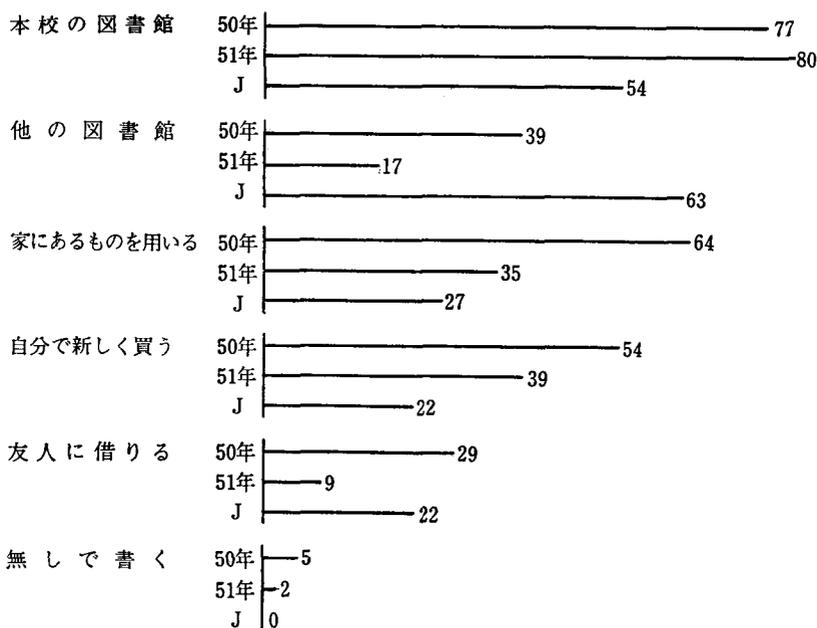
表6. 雑誌・記事索引・辞書・百科辞典の利用度(%) (2年生のみ比較)



50年度に比し51年度の英語の雑誌, 辞書, 百科辞典の使用は目立つ増加を見せている。英語系の教師達の授業での要求度が変わって来た事を示していると思える。日本語の雑誌及び雑誌記事索引の利用は, 全体的にも51年度は増加を示しているが, 特にJが一般学生よりも使用頻度が高いと言える。

D レポートを書く時の資料の入手先(%)

表7. レポートを書く時の資料の入手先（％）（2年生のみ比較）



全般に家にある資料や友人から借りるもので間に合わせていた数は、50年度に比し51年度は目立って減っている。レポートを書く為に、資料を自分で新しく買う数も減っている。図書館の資料が活用出来ることを認識しつつある傾向と言えよう。情報科学を受講した学生では、これがより明確に見られる。特に目立つ変化は、本校以外の図書館利用の増加である。広範囲に資料を求める様になったとも言えるし、本校の図書館資料が学生の要求に応えきれていない事もわかる。

「情報学」の試み

E レポートの書き方指導 (%)

表8. レポートの書き方指導 (%)

	50年度		51年度		
	1年	2年	1年	2年	J
中・高で習った	17	6	10	22	2
短大で習った	3	9	34	28	71
習っていない	80	82	56	50	27

50年11月の時点で、2年生ですらレポートの書き方を習っていないと答えたものが82%であったが、51年度では、各教科の教師達の協力があり、半数近くがなんらかの形で指導された事を示されている。

情報科学の授業では、大きな柱の一つとして、調査法を扱ったつもりであるが、自覚的に「習った」と答えた者は71%に過ぎない事は教授者にはショックであった。

F まとめ

この様な数値で表わせることは皮相的なものに過ぎない。「よく用いる」「時々用いる」と主観的に答えている内容が、どれほどの幅と深みを持って活用している事を指しているのかも疑問である。又50年度の学生と51年度の学生が等質である訳がない。この様な限界を承知で、あえてまとめてみるが、資料利用教育に対し意識が向けられ、教師達の協力があると、①直接教科をとっていない学生にも変化が見られる ②授業に組み込まれた場合は、よりそれが明確に見られると言えよう。

VI 結 び

本校は専門が英語科であるが、この様な形で、一般教育科目として、情報学をカリキュラムの中に組み込み得たことは、一つの成果ではないだろうか。基礎の力とし、他の教科を学んでいく助けとなり、将来学び続けていく手掛りとなる科目にと充実させたいと願っている。

情報学の基礎を学ばせるとはこの様なアプローチでも良いのであろうか、又本校の学生に対してこの内容は適切であろうか、この二点からの御批判を仰ぎたいと思いこの稿を草した。